

掲載地図と写真①の「ポロレブシペ

は全く海の貝類の化石ばかりである」と、結んでいる。

旭川のアイヌ語地名研究

(52)

高橋 基

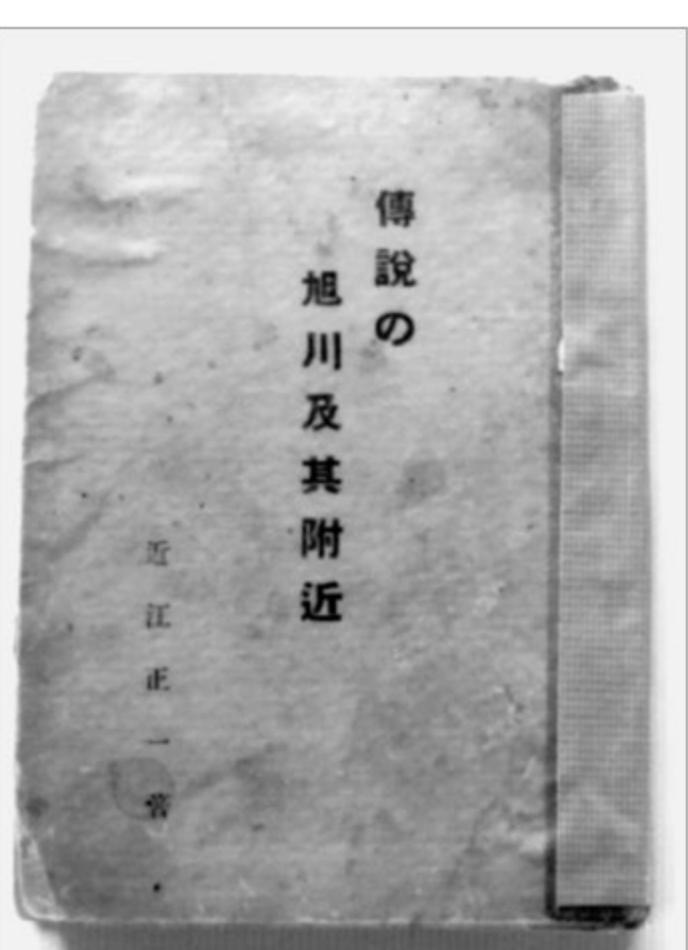
ついている・者=岩)」は、川中の大岩であるが、旭川のアイヌ伝説では、カムイコタンまでが、海であったので、カムイコタンまでが、海であったという伝説は、伝承の語が用いられた。地理的概念としての海のアイヌ語は、アトウイ(atuy)の語が用いられた。地理的概念としての海のアイヌ語は、アトウイ(atuy)であるが、漁や交易に関して、また、海のない上川や石狩川中流域では、物語や伝説の中では、レプ(rep)海、沖)の語が用いられたという。

前号では、紙幅の関係で割愛したが、カムイコタンまでが、海であった証拠は、「カムイコタンから下流は海であったのは事実で、その証拠にオトエ(現・深川市音江町)、タドシ(現・深川市多度志)附近の貝塚から出るもの

までが海であったという伝説は、伝承者が明確で、しかも、神が、写真②の「ニチエネシヤバ(鬼の首)」をはねる「ニチエネシヤバ(鬼の首)」をはねるという、カムイコタンの伝説の根幹をなす貴重なものである。前号では、昭和六年刊の近江正一の写真③の『伝説の旭川及其附近』で紹介をした。その記者として篤彦のペンネームで、「アイヌ種族の伝説」の標題でアイヌ

さて、前号で紹介したカムイコタンまでが海であったという伝説は、伝承者が明確で、しかも、神が、写真②の

「ニチエネシヤバ(鬼の首)」をはねる「ニチエネシヤバ(鬼の首)」をはねる



③「伝説の旭川及其附近」

—旭川のカムイコタン⑨—

茂作翁と訂正)と云ふ古代の旭川附近及伝説をよく知っている副酋長と紹介している。

村山与茂作は、松浦武四郎の記録で

は、天保十四年(一八四三年)生まれとなつていて、近江正一の記述では、天保七年(一八三六年)生まれとなつていて、年齢に誤差がある。明治二十年代の記録では、上川アイヌの酋長

(首長)が、川村モノクテ、副酋長が村山ヨモサク(与茂作)で、ヨモサクは日本語のできるアイヌの一・三人のうち

ずれにしても、伝説の伝承者が判明しているのは、意義深いことである。

なお、近江正一は、『伝説の旭川及其附近』を改題して、昭和二十九年に、

『アイヌ語から生まれた郷土の地名と

伝説』として刊行した。更科源蔵は、右

の書に「推薦の言葉」を書いた上、自ら

は、昭和三十年に『北海道伝説集・アイ

ヌ篇』(榆書房)を刊行した。更科源蔵

の右の書は、出版社を替えて、昭和四

十六年には、『アイヌ伝説集』(北書房

刊)、昭和五十六年には、『アイヌ伝説

集』(みやま書房刊)として出版され

た。更科源蔵のこれらの著作には、村

山与茂作が語った「神居古潭の伝説」

も、「神居古潭の神々」として採録さ

れ、出典も、近江正一『伝説の旭川及び

その附近』と明記されている。

さらに、昭和三十四年には、『旭川市

史第一巻』に、「旭川と近郊のアイヌ伝

説」として、五一話が掲載されてい

る。その中で、神居古潭の伝説の五話

は、近江正一の『伝説の旭川及其附近

あるいは、『アイヌ語から生まれた郷

土の地名と伝説』からの転載でありな

がら、どうしてか出典が記載されてい

ない。(アイヌ語地名研究会幹事)



現・神居古潭



②ニチエネシヤバ(鬼の首)

のまま転載されている。近江正一は、

「近文のアイヌコタンに、本年八十五歳になる村山與茂助(十回目に村山與

茂作翁と訂正)と云ふ古代の旭川附近及伝説をよく知っている副酋長」と紹介している。

村山与茂作は、松浦武四郎の記録では、天保十四年(一八四三年)生まれとなつていて、近江正一の記述では、天保七年(一八三六年)生まれとなつていて、年齢に誤差がある。明治二十年代の記録では、上川アイヌの酋長(首長)が、川村モノクテ、副酋長が村山ヨモサク(与茂作)で、ヨモサクは日本語のできるアイヌの一・三人のうちの一人であったと伝えられている。い

※毎月第1週号に掲載します